
転生したら、様々なモンスターになりました！！

漸 漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したら、様々なモンスターになりました！！

【Nコード】

N2440X

【作者名】

漸漣

【あらすじ】

・・・・・・説明は、転生者がモンスターの世界に生き、そのモンスター達の物語になっています。話が終わると、別の話になります。・・・・・・駄文ですが、よろしくお願いします。

転生者の先の運命は・・・
(前書き)

とりあえず、アカムルバスの設定は次話で書きます。

転生者の先の運命は・・・

ん？ここは、どこだ？

「ここは、神がいる世界さ」

紙のいる世界？

「神だ！！」

分かった、分かった。

「なら、よろしい」

で、俺は死んだの？

「そうだ、俺の手違いで死んだからな」

へー・・・俺死んだのかっ！？

「今更気づいたか！！」

よし、納得した。

「ええええええええええ！？」

いや、死んだら転生させてくれるんだろ？

「それは、そうだな」

転生する前にお願希望いいか？

「まあ、いいだろう。死なせた俺も悪いし、お前面白いし」

何個、ぐらい希望言える？

「十個くらいなら構わぬ」

おお！！ありがたい。さすが神！！

「えっへん！！・・・なにが希望か言ってみろ」

じゃあ、転生先はモンハンの世界で、姿はアカムとウカムの合体版、それで最強、超速再生、何も食べなくても生きれる、不老不死、全長が40m、

全ての者と会話できる、転生先の場所が広く広大な自然豊かな場所、でその場所には四季がある。

これで、お願いします！！

「ま、まさか・・・欲ありすぎだろ・・・仕方ないからいいか」

ありがとう！！

「では幸運を祈る」

その先は、モンスターハンター（2ndG）の世界だった。
今から始まる、物語は、この世の者を凌駕する。

その、モンスター君臨する場所は四季があり、自然が豊かで、良い場所に、堂々と居座る者。名を

「アカムルバス」と言う

転生者の先の運命は・・・（後書き）

これからも、よろしくお願いします。

アカムルバスの生態（前書き）

アカムルバスについての説明です。

アカムルバスの生態

名前：アカムルバス

全長：四十m越え

種類？：神竜

見た目：アカムトルムとウカムルバスを合したやつで、なぜかミラボレアスの翼をもつ。

色は紅と白と黒（メインが黒で紅と白は所々にあると思っ
て下さい）

特徴：見た目を見る。とてもデカイ。切っても撃っても、傷がすぐ治る。飛ぶ黒い山？。

異様な地（アカムルバスの住んでいる場所）に住んでる。生物と話せる。神々しい。eat.....。

攻撃パターン：無し、賢く動く。攻撃範囲が異常

生息場所：異様な地又は、神殿場

作者からの感想：チートすぎるね

アカムルバスの生態（後書き）

ということで、これは気ままに書いていく予定なので、更新は最低でも週一を目指します。

それではまた、会いましょう。

第一説 降臨した神竜（前書き）

アカムルバス（転生者）が来た話

第一説 降臨した神竜

とある場所に神竜を拝む村がある。

その場所は、神竜が来てできたという。

その村の周りに環境は、火山があり、密林があり、氷山があり、森丘があり、砂漠があり、樹海などがある。

その地域は四季がある、四季があるというのは四方向の場所に分けられている。それぞれ場所に

モンスターが数多く住む。しかし村、民は襲われない。

なぜ襲わないか、そこには主がいる。絶対的な力と知恵を持ち、神と呼ばれるほど。

転生者 side

『この体、なぜかは知らないが、ミラボも合わせたとかすごいな』

最近なにも、襲ってこないな、仕方ないか。

「ハンターと言う奴等が、あなたを狙って近々くるそうです」

そう言ってきたのはこの村の、村長である

『ほう、面白いな』

まあ、俺に勝てる者はいないがな・・・

「どうされます?」

『知らん、無視する』

「そうされたら、困ります」

『仕方ない、なにかあつたら呼べ』

「分かりました」

さて、しばらくは楽しめそうだ

村長 side

しかし、神竜が来て助かった。

村は今でもなにも襲ってこない、平和だ。

もちろん、ハンターはいるぞ。

ギルドの奴等が来るといふのは、少々困った。

食物には困らぬが、黒い噂が最近でてきて、別の国が攻めるとは、恐れた。

まあ、心配ない。神竜が追い払ってくれるからだ。

転生者 side

さてと、もし攻めてくるなら手荒い歓迎をせねば。
まず、者共を集めねば。

そして神竜は、咆哮を上げモンスター達を集めた。

「な、なんだいきなり集めやがって」

「さっさと、用を言いやがれ、飯の時間がまだだ」

『まあ、そう言っでない』

『用件は、近々ギルドからハンターどもがくるらしい』

「ほう、あいつらか」

「で、どうするんだ？」

『そこで、この場所を荒らすなら殺す』

「それは、面白いな」

『きたら、こっするんだ』

「ふむふむ」

とここで、モンスター達の会議が朝まで始まった。

ギルドside

「ついに、攻めるときが来た」

「「「「「おお~~~~~」「「「「「

「神竜を倒すぞー!!」

「「「「「おお~~~~~」「「「「「

そして、それぞれの計画が始まる。

神竜のことをよく知るのは、神竜の収める所の住民のみ……

第一説 降臨した神竜（後書き）

一話です。

第二説 ギルドの躊躇い

ギルドside

「た、大変です」

「どうした!？」

「別の国が侵攻しました!！」

「それでどうしたんだ」

「そ、それが全滅しました!！」

「なに!？」

「モンスター達が見事な連携で、襲ってきたらしいです」

「そ、そんな馬鹿な・・・やはり神竜の仕業か」

「恐らくそうでしょう」

「情報がある、集めてこい」

「それは、無理です・・・」

「なぜだ？」

「神竜を見たものからは、ただ「あいつは神だ」としか言いません」

「そこまでなのか、神竜は」

長い沈黙が訪れ、一人の男が言った。

「G級を呼べば、いいんじゃないか？」

「おお、それはいいな」

「なら、六人呼びましょう」

「それで、隊を作りましょう」

一人の男が良い始め、次々案が出てきた。

「よし、そうしよう」

そして、新たな計画ができた。

転生者 side

「また、面白そうなのがきたか」

神竜は、次にギルドが何をしに来るかを、村の者から聞いてそう答えた。

「それで、どうします？」

「そうだな、前は国が陣形できて、返したからなあ」

「今度は、隊でくるそうです」

「強者が束になるのか」

「よし、俺に考えがある」

そついい、神竜は計画を村の者達に話、モンスター共に伝えた。

「これで、楽しい宴が始まるな・・・」

神竜は何を思い、考えるかは神竜のみ知る。

第二説 ギルドの躊躇い（後書き）

次話で戦をします。

それではまた、次話で会いましょう。

第三説 ギルドと神竜

ギルドside

「よし皆集まったな」

「それにしても、数が多いですね」

「当たり前だ、あの神竜の領地に住む、モンスターはそこらの同種と違い圧倒的に強いと、聞くから用心せねばならん」

「今回G級は何人いるんですか？」

「10人だ」

「十人もですか！？」

「神竜討伐募集したら、集まっちゃってな」

「確かに、よく見るとかなり強い人がちらほらいますね」

ズドオオオオン！！

いきなり、ギルドの中央に何かが落ちた…いや、降臨した。
そこには、神竜がいる。

『今回はこの数か』

「「「「「！？」」「」「」」

なんと神竜が話してきた。

『安心しろ今回は様子見にきたただけだ』

皆に攻撃体制を辞めさせる。

『数は…1000か』

神竜がなにか考え始めた。

『さてと、本題を話そうか。この中で一番偉いやつは誰だ？』

「お、俺だ」

『ふむ、お前か…よし、ハンター共、攻めてくるなら並の覚悟では無理という事をあとで分かることになるだろう』

そう言い神竜は去って行った。

「神を殺すなら、試練を受けるか…」

誰かが呟いた。

部隊変更をし、G級を各二人5の部隊に分け、東西南北、中央へと別れて行った。

.....

「おい、あいつは、なんなんだ!？」

「ナルガクルガだとは分かるが…」

「あのデカさはおかしいだろ…」

「筋肉とか普通より、おかしいね」

中央部隊はナルガクルガと遭遇した。しかし、ナルガクルガだが、少し違う。

まず、普通のナルガクルガより、2倍大きい。筋肉が普通より、ある。

その姿が、ナルガクルガに似たようなもの見たかったがこいつは、本物のナルガクルガ

「まさか、こんなやつが出るとは聞いてないぞ」

「む、無理だな部隊の3分の1は死ぬな」

そう言ったのは、G級ハンターの二人。一人は双剣、一人は太刀。

「なんか、あいつ俺らのこと、観察してね？」

「挑発だろうな、ム力つくな」

「殺したくなるな」

3人がナルガに向かい交戦しに向かった。だが

ナルガは振り返り、尻尾を3人に向け振った。

突然ことで驚いたのか、3人は避けられなく当たってしまった。

本来なら、かなりキツイ一撃ではあるがなんとか、体制を保てる程度だがこいつは神竜の地に住むモンスター。その、一撃で3人は、貫通し即死した。

「おいおい、喰らったら終わりじゃねえか!!」

「仕方ない神竜が言った通り覚悟がないと、いけないな」

「お前等!! 覚悟してナルガに当たれ!!」

「『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

ナルガ side

まさかとは、思ったがいきなり来るとは驚いたが。あいつらは弱いはずがない。前に友が別れ際にハンターはとても強い、死を覚悟して戦えといったが、今の俺は強すぎる。

「『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

ほう、俺に向けて戦いに来るか…

面白い俺を殺してみろ!!

ナルガは咆哮を上げ、ハンター達に挑んだ。

中央部隊 side

俺達の掛け声と共に咆哮をナルガが上げた。

どうやら、戦いに乗ったようだ、勝てるか分からないが行くしかない

い。

ナルガが突進をしてきた。

それを部隊全部が避け、ナルガは真ん中にきた

「放て!!」

弓、ボウガン隊がナルガに向けて一斉に射撃した。

部隊人数がこの部隊では一番多い、危険も多いが…

その大人数でナルガに向けて撃つたのだ、ナルガは咆哮を上げ、苦しんだ。

まだ生きていた、俺はすかさず、トドメを刺した、ナルガは息絶えた。

「なんだ、楽じゃないのか？」

「これなら、余裕でいけるな」

「この、場所は意外にらくだな」

口々に皆思うが、部隊の10分の一は、腕が立つから分かる。

大人数で撃つてまだ生きていることはありえない。

この結果には驚いたが、何かが可笑しいことに気が付いた。

あのナルガはまだ”弱い”ということが分かる。

戦闘方法が知らないのか、戦ったことがないのかは分からないが、それでも、この地であいつは

”弱い”部類にすることが分かった。まだ強いナルガがいると分かる。次に会う奴はこいつの何十倍大変だと察知した。

今日は中央部隊の遭遇はナルガだけだった。

神竜 side

『ほう、あいつは弱かったか』

「おいおい、俺が教えたのにあいつらに突っ込むとか馬鹿だ」

『中央部隊には次誰が行く？』

「俺が行くぜ」

『よし、お前に任せよう…さて、中央は何人残るか見ものだ』

第三説 ギルドと神竜（後書き）

誰が行くのかはいつか、教えます。

次話で会いましょう。

第四説 極寒の戦い

北部隊 side

これは、おかしい。

今はこの地で言う冬と言われる場所にいる。
そして敵に囲まれている。そこまではいい、

数は10、これもいいが。

ドドブランゴの群れが囲っている。

普段なら、ブランゴを連れているがドドブランゴだ、おかしい。

ボスとなる奴はドドブランゴの更に倍。この地で生きていたということがよくわかる。
傷が多いが歴戦の印だろう。

「よし、ボスは襲って来ないみたいだ、各自倒せ」

「」「」「おおー!!」「」「」

俺はまず、1匹のドドブランゴを相手にした・・・だが

「はっ？」

切った直後そのドドブランゴが切れて死んだのだ
これも異常だ、普通ならそんなに切れるはずがない！
なぜだ？この地で強いというのはうそなのか？

「おい、お前等こいつら、ブランゴ並に弱くないか？」

「確かに一撃で殺せるとは驚いた」

「「「「！！！」」」」

突如、いきなり地面からボスが飛び出してきた。

このせいで、部隊の一人は死に、5人が負傷した。

「こいつは、強いぞ！気を抜くな！」

「「「「おおー！！！！！」」」」

こいつは普通の個体と比べ強いのが分かる。

本物の生き残ったやつだ。

G級の二人はさっきのに巻き込まれ、気絶していた。
俺らがやるしかない。

「おりやつー！」

ギンツ！

とある、雑魚装備の奴が奴を切ったが弾いた

こいつは武器はいいし、相性は普通。それでも弾く。

毛がすごく硬い事が分かったが、そいつは返り討ちにあい死んだ。

「お前等、あいつの古傷を狙え」

ボスは雪玉を投げてきた、強者は避けたが下位の数人は避けられず
気絶した。

隙を狙い、切り付けは逃げる まさに ヒット&アウェイ

それを古傷に向かい切る、効果はあったようだ。
あいつが呻いている。

「射撃部隊、撃てーっ！！」

「くたばれ！！」

あいつは、息絶えた、なぜあいつはあまり攻撃してこなかったのだろうか？

よく、分からないが一つの試練はクリアした。

「さてと、次はどんな強者が相手が知りたいな」

死者を出したが北部隊は”一つ”の試練をクリアした。

神竜 side

「あいつは、馬鹿なのか？」

「たしかに、馬鹿だ相手の事を知ろうとするから死んだ」

「次はだれを送るか」

「我に行かしてくれ」

「お前はダメだ。まだ出すわけにはいかない」

「じゃあ、俺の手下はどうだ？」

『あいつか、まあいいだろう』

北部隊は知らない、次の相手で死者が増すことを…

『以外に強い奴がいるものだ、残るのは100人くらいか』

第四説 極寒の戦い（後書き）

今回はドドブランゴの群れですね。

また、次話で会いましょう。

第五説 灼熱の試練・高台の試練・砂漠の戦い

西部隊 side

この、場所は夏と呼ばれる。場所通称火山。

「これは、ひど過ぎやしないか？」

「確かにひどいな」

「うおっ！」

「危ないな、なんでこんなに避けないといけないんだ？」

「しかしこの数は多いが小さくて助かったな。どうやら、この試練は避けることが必要か」

「このグラビームの数は多すぎるだろ」

「確かに20匹のグラビ（小さい）から逃げるのは怖いな」

グラビの子供だが人並みに大きい、おまけに後ろからグラビームで狙う×20これはきつい。

「ふう、どうやらクリアしたみたいだな」

「だな」

ここまで、きたら子グラビは追って来なかった。

しかしこの試練で15人は貫かれて死んだ。

「さて、合流するために向かうか」

そして、部隊は進んだ。

南部隊 side

ここは春と呼ばれる場所。通称崖下り。

「おいおい、ここを降りるのかよ、それであいつらから避けるだど？鬼畜だな」

「ある意味で、一番死亡率が高い所に来てしまったな」

南部隊がいるのは崖（MHP2Gの森丘の崖みたいな物）の上、しかしその崖はとても高い。

高さは500mくらいあるだろうか、しかもそこにリオレウス、リオレイヤ計6匹がこちらに照準を合わせ、火球をはなとうとしている。

「いいか、お前等！俺らはここを避けながら下るんだ、気を付ける。下手したら即死だ」

「気を持って下れ！」

「」「」「おおーっ！」「」「」

「よし、いけー！」

皆が崖を下り始めてからあいつらは火球を放った。

部隊がバラバラになるが、急いで降りないと死が待っている。

ドンッ！！

「うあああああ！！」

俺はなんとか別の着地点に飛んだが近くにいた奴は間に合わず、火球の爆風で崖を落ちて行った。

皆はそれを見て、全体を見ながら降りつつ火球を避けていた。

しばらくして、皆が降りたとき見たものは。

落ちたハンター達の死体だった。火球を喰らった者や落ちた奴、30人くらいあった。

「しかし、よく残ったな」

「確かに、回避に専念できたな」

「さてと、さきに進むか」

南部隊は1つ目の試練を越えた。

東部隊 side

ここは秋と呼ばれる場所、通称砂漠。

「しかし、あいつがいるとはこっちにとって都合がいいのか悪いのかわからんよ」

「あいつは危険だがこの部隊ならすぐに終わるだろう」

今いるのは谷、谷底ではなくその上にいる。谷はそんな深くはない、30mくらいはあるが。

この部隊は賢かった。遠距離系の武器を持つ人数が一番多く、指揮がとれている。

そしてこの部隊が今見ているのが、ティガレックス。大きさは通常個体の2倍、通常と同じ硬さを
持っている。

「いつ、狙えばいいんだ？」

「まあ待て、向こうに着いた奴等が…来たか」

ティガは谷底にいる。部隊は谷の上。効率が良い。

ここで、一気に狙い撃つつもりだ。

そして、合図をし。

一斉に射撃を開始した。

ティガは突然の不意討で、全弾受けてしまった。

いかりのあまり、部隊を狙いに谷を上るが、上からの閃光玉を喰らい落ちる。

そこを一斉射撃。それを、数回繰り返しティガは絶命した。

「あいつの体力高すぎだろ」

「今回は地の利で誰も死ななかった」

「ここが平面なら」

「間違いなく半分は終わってたな」

無傷にクリアした部隊だったのはこしかない。

「さて、合流するか」

不思議とすべての部隊は1回の遭遇しかなかった。

神竜 side

『以外に残ったか。だが、本当の試練はここから始まりだ』

第五説 灼熱の試練・高台の試練・砂漠の戦い（後書き）

次話であいましょう!!

第六説 集合し、立ち向かう準備。(前書き)

今回は短めです。

第六説 集合し、立ち向かう準備。

今はこの地の村に来ている。やっと最後の部隊が来たようだ。

「けっこう残ったな」

「不思議と最初にあってから、なにも出会わないんですよ」

「全部隊からも同じことを聞いたな」

「でも、900人くらいですかね」

「これからが一番大変そうだ」

「そうですね」

「あとで、神竜が来るらしい」

「な、なぜですか？」

「この村が守られているのは、神竜が守っていたらしい」

「それで、くるんですか」

「ああ、そうだ」

「ギルドの方ですか」

「ん？」

「村長ですよ、隊長」

「それは、失礼。どうしたのですか？」

「我らから見まして」

「見まして？」

「よく、こんな少ない人数で来ましたね」

「「「「「！！！！」」」」」

「どういう、ことだ？村長」

「え、ええ。前にこの村を守るときに神竜がですね。今いるモンスターー共を」

「共を？」

「一撃で壊滅状態までにして、手懐けさせたんですよ」

「「「！？」」」

「今いるのは、前いた時の3分の一くらいですかね」

「強すぎだろ」

「ちなみにどんな攻撃をしたのですか？」

「えーと、確か…ソニックブラスト？ですかな」

「なぜ疑問系なんだ？」

「確かに最初見た時は、ソニックブラストかと思ったのですが、なにせ規模が違いますから」

「どのくらい、デカいんだ？」

「あそこに、直線状に空いたところがありますよね」

「あるな」

「200mくらいか…まさか！？」

「ええ、あれは一撃で空けたんですよ、音も無しに」

「「「！？」」」

「おかしいだろ、無音であんなに空けるなんて」

「でも、村人は全員見ましたよ」

「戦う前に負けが決まっちゃったな」

「あ、ああ」

『なら、帰れ』

「「「！？」」」

「い、いつのまに」

「なにしに、来た？」

『今日は敵の確認だ』

「おいおい、フェアじゃないだろ」

『安心しろ、様子見だ…それよりもこの数で手練れが少ないか』

「何を言いたい？」

『お前等全員死ぬな』

「？」

「俺らはあいつらを倒したんだぜ？」

「試練もクリアした」

『なにを言っている？あれは試練では無い。寧ろあれは雑魚の訓練だ』

「あいつが雑魚だというのか？」

『当たり前だ、あんなのは一番弱い』

「あんなのって、普通に上位越えてたぞ」

「一人はキツイ」

『ではな、次会うときは何人残るか見物だ』

神竜は去っていった。

第最終説 残った者対神竜とその後（前書き）

いろいろ、飛ばしました。

いきなり、最終回です。

連載は勿論続きます。

第最終説 残った者対神竜とその後

神竜 side

『ほう、よくここまでこれたな』

「当たり前だ、俺達はハンターだここまで残ったのは30人だがな」
よく残ったものだ、最後にシェンガオレンをださせたがよく倒したものだ。

二日掛かったが、今やこの地にいるのはまだ出してない手練れ達ぐらしいかないいな。

『さて戦うか』

「ああ、そうだな」

ハンター side

神竜は咆哮をあげた、それだけで近くにあった木が吹っ飛ぶ。まともに喰らったら終わるな。

ハンター達は遠距離組がまず攻撃を始めた。体に貫通しているがすぐに再生してしまう。

神竜は無音のソニックブラストを放つ。それに気づかず、5人が跡形もなく細切れになった。

これでよく分かる、まだなにか隠し持っている。

しかし、無駄な足掻きと分かりながらもハンター達は切る、撃つ、玉を使う。

どれも無意味であった。ふと誰かが呟いた。

「これは、勝てない」

「やはり、無理だったんだ」

二人のハンターが逃げる。そこに神竜がウカムが使うプレスを放つ、二人は氷り、砕けた。

「なあ、神竜よ」

『ん？』

「もうやめにしないか？このままでは恥ずかしながら俺達の負けが決まっている。

それにギルドに報告すればなんとか手を打ってくれるはずだ」

『そうか、負けを認めたか…ならこれをやろう』

そういい、神竜は自分の体を削り、鱗を渡した。

これはみたことがあった。村の者が全員身に着けていたのだ。

「これは？」

『鱗だそれを持っていれば、この地域を自由に敵に襲われることなく進める。但し、狩り目的に使うことは許されない』

「それが、掟なのか」

『ああ、そうだ分かったなら行け』

俺達は帰った。これをギルドに報告すると、討伐を禁止することになった。

誰も勝てはしないからだ、しかも友好的？に接してくれるようなので、問題は無い。

後に伝説と化したこの物語。 実在する伝説。 時代が進んでも尚、語り継げられる。

いつの時代になっても、神竜は死なない。 例え現代の兵器でも、このことを全ての者が知ることになったのは神竜は知らない。

第最終説 残った者対神竜とその後（後書き）

この話は作者の気分次第ですので、もしかしたら番外編とか出すと思います。

希望があればですが。

早いですね終わるのは。

とりあえず次の話は決まっているので、そのことは。

また、投稿します。

希望があれば番外編などを作りたいと思います。

それでは、次の伝説で会いましょう。

転生者の先の運命は・・・
(前書き)

はい、次の物語は神竜と違い、話が多くなるかもしれません。

転生者の先の運命は・・・

神だっけ、久しぶり

「？お前かどうした」

なんか、別に転生しなくなった。

「まあ、構わぬが」

あ、世界は変わらなくていい

「そうか、なにが望みだ？お前は面白い、好きなだけチート機能でも追加しろ」

すごいありがたいよ神

じゃあ、世界は変わらずMH。次になるのが狼。でそいつは全長2000？、全高は500？。

無論、無敵追加。不死。不眠不休不食（食べなくても生きれる）。会話ができる。

物語の初めは…でお願い。

「お前は相変わらず面白い奴だな、いいだろう。また別のになりたかったら来いよ」

ありg…て落ちるのかあああああ

「また、面白い話が見れそうだ」

転生者の先の運命は・・・
(後書き)

というわけで、狼になります。
詳細は続けて投稿します。

フェンリルの生態（前書き）

新しい物語の始まり（の前）です。

フェンリルの生態

名前：フェンリル

別称：王狼

種族：不明

全長&全高：20メートル。 5メートル

特徴：とにかく大きい銀狼（怒ると金狼）。不死不眠不休不食。そして無敵。会話ができる。eat：（これ以上言々と面白味がなくなりそうなので割愛します）

攻撃パターン：不明

作者から：生態を詳しく書いてない気がしますw

（余談と言つ名の字稼ぎ）

とりあえず、この物語を作るきっかけは友人と話している時に思いついたものです。

これを読んでいると聞いてアドバイスとか聞こうかと思った時に
これ进行いつき、次はなんも物語にしようか考えて作りましたw
友人はこのことを知りません。

後書きを無視してここで終わらせます。

それでは次話から、王狼の物語です。

1 匹目 王狼の再来

ここは？どこだ…恐らく洞窟か…なんか家？みたいだな。

王狼がいるところは、転生先の拠点。洞窟なのだが、天井が一部空いており、空が綺麗に見える。

更には、湖があり魚が住み着いている。ガノトスが住めそうなくらいにある。ほかにも寝室？があつたり。キノコが生えている場所があつたりeat…

しかし、凄いなここは地下の豪邸だな。広いし明るいところがあるな…出入り口は…あつたな。結構あつた…」

少し外に出てみよう。

出てみた。

・・・近くに村があつた。多分気付かれないと思うけど。あと家の外装が洞窟そのままだ、俺以外に開かない。…なぜに自動に開く？そこは気にしない事にするか。

さっそくこの体で試してみるか…

・・・1時間後・・・

なにかが可笑しい。

分かったことがある。

・毛？がとてもふわふわしているが、戦闘だと固くなる。

・怒ると毛が金になる。

・なぜか口からビームが出る（しかもいろんなのが出る）。

・速い。

・すごく飛ぶ。

・鉤爪がとても強い。

・ほかにもありそう

…ビームが可笑しいことに気が付いたりオレウスが遠くにいた。ビーム。貫通した。

待て待て待て、なぜ届いた？！？はあった。調整できるか？

…できた。

他にも何かできそうだな。

家帰るか・・・

??? side

今私はリオレウスに追われています。

「きゃっ！」

転んでしまった。

やばい、食べられる。

そう思った時

グアアアアア！！！！

「え？」

突然リオレウスにビームが貫通した。

その方向を見てみると。狼がいた、村の伝承で聞いたけど本当にいたとは思わなかった。

伝承によると何100年も前からいて過去に何度かこの村を守ったらしい。

教えてもらって嘘だと思ったのだが。本当にいた。

.....

く村く

「村長！村長！」

「どうしたんだい？シズク？」

「狼がいたの、あの伝承の！」

「なに！それは本当か？」

「うん！」

「ど、どんな奴じゃった？」

「銀色だった」

「銀狼… 本当にいるとは」

く村長 side へ

まさか、王狼に出会うなど思わなかった。
やはりこの娘が見つけるとは…

side out

その夜、その村は大きな祭りを上げたそうだ。
王狼の再来を喜んで、この祭りは王狼際と呼ぶことになった。

く王狼 side へ

さてと俺は伝承の狼か神めすごいことをしてくれたな感謝だ。

さてとこれからなにをしようか。

まずは地形の確認か。

.....

1 匹目 王狼の再来（後書き）

1 話です。

次話で会いましょう。

2 匹目 王狼と少女と村

とりあえず、地形を確認した。ここは平原だった。開けた場所に村があり、少し遠い所に密林がある。山もある。あつちは…砂漠か…行きたくないな。

さてと探検するか。

.....

数年後。

シズク side

あれから数年間狼と会うことは無かった。

見かけることはあるけど、それも一瞬。速いのだ狼の移動速度が。

あ、今歳は16です。ハンターにもなりました。今では上位ハンターです。私には向いていました。

「歩くとしようかな。散歩に行こう」

私は歩き始めた。

密林の方に行くとそこには…

「あ。」

王狼がいました。

王狼side

あ、会ってしまったよ、人間に。

まあいいか。

「王、狼ですか？」

少女が話しかけてきた。

――当たり前だ。

「喋った!？」

――話して悪いか？喰らうぞ

「すみません・・・」

――何の用だ？

「あ…そうだ。村に来ませんか？」

――なぜだ？

「あなたは昔から有名なんです。今では王狼際もあるんです、今日やるんです」

――ほう、俺がわざわざ行けと？

「いえ、いえ、できれば来てほしいです。」

なんかこいつ面白いな。言ってみるか

―仕方ない行つてやろう。但し俺が来ることを言つなよ？

「分かりました。それではまた夜に会いましょう」

―ではな。

さて、家に帰るか。

俺は家に向かった。

少女も名前はシズクと言うそうだ。

シズク s i d e

やっと会えた。あの狼に。一緒に狩りに行きたいです。
でも、少し怖いですが…来た時に頼んでみましょう。

でもまずは

「村長！」

「どうしたんじゃ？」

「また会えました！」

「本当か！」

「しかも話しました！」

「なに！？すごいな…」

「今日は王狼際ですね」

「そうじゃ」

「なんかいい気がしてきました」

「わしもじゃ楽しみじゃ」

王狼際に狼さんが来ることを知らせはしません。
約束ですからね。

王狼side

今家にいる、この数年間でいろいろあった。あったんだ。

湖には魚がいるがガノトトス子がいた。亜種だし。この経緯は

探索した↓湖に行く↓卵を見つける↓生まれる↓俺（。D）↓俺
を見る↓懷いた↓俺（。D）↓家に住むことになった。

亜種だし。食べ物は勝手に家の湖から別の川とかに行き狩る。

これで問題はない。家の魚を食べないようにさせた。しかも亜種は♀だった。

そして、台所にいくとそこには。大量のアイルーがいた。ちなみに

経緯は

探索した↓アイルーを見つける↓泣いていた↓集落が壊されたらしい↓俺の家を空ければ住めるんじゃない？↓提案↓アイルー達大喜び↓家を拡張↓住んだ数は100匹↓俺は主らしい↓つまり、配下。

という具合になった。

「にゃにゃ、ご主人様！おかえりにゃ！」

―今日は出かける

「どこへ行くですかにゃ？」

―王狼際に行く

そこまでの経緯をアイルーに話した

―家を任せるぞ

「大丈夫にゃ僕たちに任せるにゃ！！」

―頼んだぞお前達

「「「「にゃー！！」「」「」「」

あとは。

―スイ行ってくるからな

「ギャアオ！」

スイとはガノ亜種のことだ。

よしこれでOKださてと行くか。

2 匹目 王狼と少女と村（後書き）

展開が早いのは気のせいです。

3 匹目 王狼祭

く村く

王狼際が始まっていた。

王狼際とは、王狼の再来？を記念した祭り。結構有名になりかなりの人数が来ていた。

「早く来ないかな」

シズクは王狼が来るのを知っているためとても楽しみにしていた。

ついにその時が来た。

王狼 side

とりあえず来てみたが、人が多いな。
皆俺を見て驚いている。
なにせ、いきなり広場？にいたからだ。

あいつを呼んだがくるのか？

「王狼さん！」

——お前か

「きてくれたんですね！」

「お、王狼が喋るだど!？」

――当たり前だ

しかし、ここにいるのも飽きたなそろそろ帰る王狼さん」

――なんだシズク？

「名前覚えてもらえて嬉しいです。あ、あの……」

――早く言え

「はいっ！旅に連れて行ってくれませんか？」

なに！？俺についてくるだど！

俺は脳内再生した。

旅についていく↓俺の仲間↓初の人間！！↓GJ！！

――いいだろう。ただしお前と友一人だけだ。

「いいんですか！？やったあ！……えと、じゃあ友達連れて行きますね！明日また来てください」

――仕方ない明日またくる

俺はそう言い家に帰った。

――ただいま

「『『『お帰りなさいにゃー!!（ギヤアオ!!）』』』」

―良い知らせだ。明日人間が二人仲間になることに決まった

「ほんとですかにゃ!?!」

「ギヤアオ」

嬉しそうだ。

―アイルー達は家を広げろ、そして俺の仲間と分らせるには首輪があるな。ついでに作れ。

「了解ですにゃ!…お前達やるにゃ!」

「『『『にゃー!』』』」

相変わらず元気がいいな。

―ん? スイも嬉しいか

「ギヤオ!」

さてと、面白くなってきたな。
明日に決めるとするか。

（翌日）

さてと行くか。

―迎えに行ってくるがアイルー20匹ほど連れて行く

「「「「行きますにゃー!!!!」」」」

―よし選抜終わったし行くか

「「「にゃー!」」」

俺はアイルー×20を背中に乗せ行く。

.....

「あつ!来たよ」

「ホント!よし、ちゃんとできるか不安だけどやるわ」

―来たぞ

「えーと背中になんでアイルーがいるんですか?」

「それは主の家にすんでるからにゃー!」

「そうなんですか」

―さてと隣にいるのが友か?

「はいそうです」

「私の名前はハクです。よろしく!」

—ハクが分かった。じゃあ家に行くかお前達背中に乗れ

「はい」

俺はふたりを乗せ、家についた。

—お前達連れてきたぞ。

「「「「にゃー!!!」」」」

歓迎してくれているようだ。スイもだ。

「あの、なぜガノトトス亜種がいるんですか?」

事情を話した

「ほかにもあるんですが洞窟…ですよね?豪邸にみえるんですが…」

理由を話した。

「最後になぜカッコいいんですか?」

—知らねえよ!!

最後のは可笑しいが気にしないことにした。

—お前達の部屋はあそこだあとはアイルーに聞け

「「はいつ!」「」

なんか、スムーズにいったな。

さて、何をしようか？

3 匹目 王狼祭（後書き）

忘れてましたが。アイルー達とスイは首輪をしています。二人には、手首につけています。

次話で会いましょう。

4 匹目 外装を改装、中身も豪華に、新たな仲間

1ヶ月が経った。

シズクとハクは家に馴染んだようだ。

なんとスイが話せるにならなかった…まださきのことになりそうだ。

アイルー達が賢くなった。

縄張りが広くなった。食べなくてもいいんだけどとりあえず確保。

家が狭くなった。メラルーが50匹増えた。経緯はほぼ同じ

メラルー達発見↓集落が壊された↓嫌な予感↓家に住みたいらしい
↓いいかあ↓決定↓俺（。D）

となった。

ちなみにランポスの群れ（20匹）がいたのでお話して家の周りの
見張りをやらせた。

家が狭くなると思い俺はまず地下に繋げることにした。
アイルー達を引き連れ進む。100m進んだ。壁をひっかく。でき
た。

外も変えた。洞窟から上に広げ丘っぽくなった。

結構広くなった。当分は困らないだろう。

ちなみに食材は、自動収穫機を作り無限にある。肉もあるぞ。（あれ？マイクラっぽいのは気のせいかな？）

—とりあえずできたな

「できましたね」

「疲れたよ」

「できたのにや」

—お疲れだな。

「ギャオ」

—スイもよくやった

よしあとはなにをやるう…

「主にお願ひがあるにや」

—なんだ？

「地下を掘り進めていいかにや？メラルー達と一緒に新しい自動収穫機を開発するために材料が必要にや」

—わかったいいだろう。明かりを忘れるな

「了解にや！お前達行くにや」

「「「「「にゃー!!」「」「」」

いつ見ても可愛いよなこいつら。

改めて家を見たがどうみてもモンスターが住んでいるようには見えない。

ついでに湖も拡張した。

いつ外に行くか。あいつらはそろそろ町へ行くらしいからその時に出かけるか。

先になにをするか…!…ランポス集めまくるか、見張りにはちょうどいい数はあと180くらいあれば十分かランポス200体の見張りw面白いな。

そこで俺は重要なことを思い出した。

ランポス200↓腹が減る↓餌付け用の餌がなくなる↓まずくね?

あえて俺は全部追ひ払うことにした。

数分後

終了した、良い血をみたぜ。まずいけどw

最近森丘に強い奴が出たらしいな行くか。

―お前達

「「「「「なんですか？（にゃ？）（ギヤ？）「「「「」

「今から俺は狩りに行か「「「「行きたい！（です！）（にゃ！）」
「「」

「だめだお前等には役目があるだろう。シズク、ハクは狩り。メラ
ルーは主に採掘。アイルーは開発、発掘。スイは大きくなること。
分かったか？

「「「「はい！」「」「」

「では行ってくる。

このとき俺は後悔していた。まさかあんなことになるとは思わなかつた。

4 匹目 外装を改装、中身も豪華に、新たな仲間（後書き）

次話で会いましょう

5 匹目 まさか、あのパターンか!!

今、森丘にいるが・・・

「助けてください」

―なぜこっちに来る!?

とりあえず、今の状況を説明しよう。

逃がっているのがキリン。だけど体格が通常よりも小さい。

追いかけているのは、リオレウス。なんでこいつばかり会うの？

5 回目なんだけど。

まあいいや助けてあげよう。

俺はとりあえずビームを放った。

「グアアアアアアア!!」

―弱っ!?

今回は弱めに撃つたはずなんだが…。

「あ、ありがとうございます!」

―質問いいか?

「何でしょうか?」

―なぜここにいる? お前は確か珍しい存在のはずだが?

「王狼よりは珍しくありませんし・・・あれ？王狼？」

—ん？なんだ？

「ええええええええ！？」

そんなに驚くことはあ…るか。

「なんでいるんですか？」

—ここに強い奴がいるらしいから来た。

「その強い奴って…あれですよ」

—は？弱すぎるだろ

「え…弱いなんてあれがの中で強いですよ？」

—え…。なにしにきたんだよ俺？観光か？まあいいか。お前なんでここにいます？

「え」と、火山にいたらハンター達に追いかけて、逃げたらグラビモスに追いかけて、また逃げて、リオレウスに追いかけて今の現状です」

—はつきりいう。アプトノス以下だろ？

「そ、そんな…ただモンスターと戦ったことが無いだk…どこに行くんですか？」

—なんか疲れたから帰る。

「ええええ、私に話を聞いておいて無視ひどいです」

—じゃな。

「ま、まってください！」

—？

「私を鍛えてくれませんか？王狼さんに鍛えてもらったら麒麟の中で最強になれます！あと、身の回りの世話もします！」

確かに住人が増えたからいいか。

—ついてこい

「いいんですか！？やったく！」

そして家に帰るのだった。

あ、また増えた…と思う王狼だった。

—王狼宅—

—ただいま。

「「「「「おかえ…り？」「「「「「

「誰？」

「「「「にやにや!?」「」「」

「ギャオ」

「こいつは麒麟。この家に住むことになった以上。

「質問！」

「？」

「なんで麒麟がいるんですか？」

「それ僕たちも思ったにや」

「なんかいた。

「ひどいです！」

「いろいろあったんだ。

「「「「分かった（にや）」「」「」

「よろしくお願いします」

さて今日は寝るか。

次の日。

よく寝た、朝日でも見るか

俺は家の一番高い所に行き。

ワオオオオオオオン！！！！

遠吠えをした。以外に楽しいんだよ。

俺の住んでいる周辺のモンスター達が起きる合図となっているのだ。最近家の周りに草食モンスターが集まっているな。

俺は朝を迎えた。ハンター達が視察しにくることを知らずに。

ハンター side

俺の名はジャン。新米ハンターだ、他にも二人いるがまだいいだろう。

今回はアプトノス達が夜になるとある場所に向かうという情報を知するために依頼されたのだ。

そして夜になると移動し始める。

「移動したな」

「追いかけてようぜ」

「いきましよう」

そしてある場所につくとても静かだ。

一夜をあけ、日が出てきたときにジャンがなにかを見た。

「おい、あれ」

「?…こいつは!？」

「まさか、本当に…」

ワオオオオオン!!!

「あいつは確かに」

「間違いないな」

「王狼が実在するなんて」

俺は驚いた、最初は嘘だと思ったが本当に存在したなんて。

記述には『王狼は目覚めるときに遠吠えをする事がある。その声は何者も抗えないことを見せるように』

「これは報告しないと」

「急いでいくぞ」

「あれが、王狼」

俺達は急いでギルドに戻った。

5 匹目 まさか、あのパターンかー!! (後書き)

次話であいましょう。

六匹目 一国の奇襲とギルドの考え。

「ギルド」

「依頼に行っていました」

「そうか、報告してくれ」

「はい、移動した所は……」

「どうしたんだ？」

ジャンは躊躇いながらに言う

「お、王狼がいました」

「おかしい話だ王狼など只の伝説ありえないな」

「私もみました。あれは間違いなんです」

「そんな証拠がどこにあるのかね？」

「俺達は奴の遠吠えを聞いたんです」

「「「「！！？」」」」」

「それは本当か？」

「本当です。僕は記述に書いてあるのを知っていますから、間違い

「ありません」

「あいつがいるとすれば、確かに安全を確保に移動するのか」

なにか、怪しい事を考えているなあ

「ハンター達に知らせろ、王狼が復活したと」

「はっ!!」

近くにいたハンター達が酒場へと向かう。

なんかこれからきつくなりそうだ。

でも可笑しいな、近くにアイルーがいたんだよなあ今度見に行きましょう。

.....

王狼 side

—今日は何しようか？

(さっそく私を鍛えてください)

「あ、じゃあ私も！ハクもやるよね？」

「う、うんやるよ!」

—今日はキリンと戦え以上。

（困ります、なんで私ハンターと戦わなければならないんですか！？）

—弱いから

（し、仕方ないじゃないですか）

涙目になってもだめだ、戦えば強い俺には分かる。

—じゃあ、帰れ

（分かりました!、やります。）

「え」と…なに話しているの?」

—どうでもいいじゃないか。昼までやれ以上

（「「はいっ!」「」」

そうして昼まで戦った。

—キリン・・・

（なんでしょうか?）

—強いじゃねえか。あいつらは上位ハンターだぞ、よくやったな

（ありがとうございます！頑張れそうです）

「ねえ、狼さん？」

―どうしたハク？

「なんであんなに強いのか？」

―知るかむしろ俺が知りたい

正直驚いた。雑魚！とか思っていたがキリンは案外強かった、昼寝して帰ってきたら気絶している二人を見て驚いたよ。

―さて飯にするk…『ドゴオオオオン！！』ん？

「大変ですよ！人間が襲ってきたにや！確か名前は・・・分からないにや！」

分からないのかよ！！まあいいや。

ん？襲う？

襲ってくる↓俺を殺しに？↓ドン！↓家壊れる↓いい度胸してるな
↓フハハハハハ

―この俺に攻撃とはふざけた野郎共だ！面白いモンスター共をつれて行くぞ数は六匹いれればいいだろう、報酬は俺の支配下式日黙秘にしてやるう。メラルー、スイに乗って伝えてこい。

「了解にやー！！」

数十分後

来たか

―お前等にはあの人間どもを殺せいいな？報酬は言った通りだ。俺の指揮下に従うようにいいな？

「グオオオオオオ！！」

したがってくれるみたいだ、こいつら話せないけど強いからな
こいつらと言ってもティガ二頭、グラビ二頭、レウス二頭だけど、
なんでレウスに会うんだよ！多い…

―じゃあ行つて来い

そついうとモンスター達が一斉に人間共に向かった。
俺は合図に戦の咆哮を響かせた。

（軍）

とある生き残りの話。

「俺は軍に雇われた傭兵、腕はかなりあると自負するが。あれは可笑しいそのことを詳しく話そうと思う」

生き残りの傭兵ラプターは語る。国が起こした過ちを物語るように・

六匹目 一国の奇襲とギルドの考え。(後書き)

次話で会いましょう！

7 匹目 ラプターと王狼

あれは驚いた。

モンスター達が統率の取れている動きを見せる。

「あいつら、強いな」

「確かにそうだな」

今話しかけたのは、戦友のローグ。

そして俺達は最後の砦にいる。

防衛網を破られたようにバリスタを大量に配置してある。

「り、リオレウスが飛んできました!」

飛び込んできたのは、新人のジャック。今回で初の経験をする事になる。

傭兵はハンターとは違い金で雇われている。実力が高い分金が上が
る俺は一回で四十万くらいだ、生活には困らない額だ。

「お前等、バリスタを放て!」

俺は砦にいる者達に声を上げた

一斉にバリスタがリオレウスを貫く、落下した。

「死んだか？」

「はい、大丈夫です」

「そうか」

しばらく防衛をしている間に敵はリオレウスだけだった。

他の砦や大隊も出くわしたが、何とか倒せたようだ。

「残るは王狼、ですか」

「そうだ、俺は勝てる気がしないぜラプター」

「俺もそう思うが金で雇われた以上やるしかないだろ？」

「ハハハ。そうだな！小僧しっかりしろよ」

「了解です！」

「さていくか。敵の本拠地へ」

俺は行く準備をするが。

「ラプターさん！国王が集まれています」

「そうか…しっかり考えてくれたか？馬鹿げた戦をやめるのを」

小声で呟く、しかし

「そうですね、終わってくればうれしいんですが」

「だな」

よくあの声が聞こえたなと思うラプターだった。実は近くにジャックが居たため聞こえた。

「それでは、儂から一言を言う、ぜったいに狼を殺せ！いいな？」

「「「「「「はいっ！」「」「」「」」」」」

やりたくない、何人かはそう思うい。楽しみだとう奴等もいる。ここにいるのはある程度は強い奴等なのだ。

「さてと、俺達は先に行くぞ」

「おう！」

「はいっ！」

そつ、俺達だけは任務があるのだ。

他のもには真正面からだ俺達は王狼の住処の探索なのだ。

これからが大変なのだ………

7 匹目 ラプターと王狼（後書き）

次話であいましょう

8 匹目 一撃崩壊

「えーと、ここか」

「そうみたいだな」

「なんか家のような…」

今俺達は王狼の住処と思われる場所にいた。

周りにはアプトノスが呑気に草を食べていた・・・

王狼 side

さてと向かってきているようだな。

そこに3人いるが構わないか

—おい

「なんでしょうか？」

「なに？」

—今から面白い物を見せてやる。

「「「？」」」

—俺にとってではだが…あそこに人が見えるな？

「「「はい」」」

――撃で8割壊滅させよう

「「「!!!」」」

シズク達は驚いた。確かに軍隊？が見えるが五〇〇m先に先頭にいるのだ。

――じゃあ、いくぞ・・・

高熱のビームが軍隊に向けて飛ぶ。

その瞬間、真ん中を貫き最後まで届いたのだ。当たった者達は溶けたり、風圧で吹き飛んだのだ。

「「「!!!」」」 「「「!!!!!?」」」

なんか二人驚いているな。

――ミスした、半壊しかできなかった。距離が足りないな

「あの、私こんなの見たことが無いんですけど...」

「「絶対勝てない」」

シズクとハクが言うが無視しよう。

その高熱のビームを受けた隊は撤退した・・・

――お前達は先に家に帰ってろ、俺は用がある

「「「分かりました」」」

2人と1匹は家に戻った。

さて、少し出かけるか・・・

ラプターズside

「なんとということだ・・・」

「規模が違い過ぎるッス」

「なぜ、俺らはこんなことをしに雇われたのだろう・・・いや、王狼に付こうか・・・」

「俺もそう思ったg：おい、人がいるぞ」

「んなわけあるk：いたな」

「なんか、馴染んでるように見えますよ」

王狼がこちらに向いた。

ニヤッと、不意に笑ったような気がした・・・

「逃げるぞラプター！！」

「おう」

「は、はいっ」

俺達は逃げようとするが…その先に王狼g…なぜここにいるんだ！
？早いだろう！！

—おい

「「「！！？」」」

—聞いているのか？

「まさか、王、狼？」

—いかにもそうだ

「話せるのか」

これは都合がいい事なのか、悪い事なのか・・・

—お前等は傭兵だろう？

「そ、そうだ」

—そいつらに言ってこい…俺のテリトリーに入るならば、喰ラウ・
・といってこい。

「わ、分かった…い、いくぞっ！」

「「おう！（はいっ！）」」

俺達は急いで戻った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

く国く

「ただいま、戻りました」

「お前達は無事だったか」

「半壊したんですね……」

「誠に残念だが、あれには驚いた……」

「報告があります!」

「よしでは先に聞こう」

「王狼から伝言がありました!」

「「「「「「「!!!!!!」」」」」」」

「な、なんと伝えられたのだ?」

「『俺のテリトリーに入るならば、喰ラウ』と」

「！！…そ、そうか無闇にやらぬ方がいい。これより、討伐を禁止とする！皆に伝えよ」

「ハッ！！」

「な、なんかこの王は頭がいいですよね？」

「ああ、前は馬鹿な奴が国を自滅させたらしい」

「とりあえず、世界に広がるなこのことは」

「確かに、かなり規模がデカかったからな」

俺達は自分達が住む家に帰って行った

.....

翌日…

ギルドside

8 匹目 一撃崩壊（後書き）

一撃崩壊？しましたw

次話で会いましょう

9 匹目 ギルドと王狼

「・・・ということになりました、国は半壊しました」

「それは、本当か!？」

「さすが王狼、しかしこうなれば討伐もできまい」

「そうだ、誰かが王狼と話したらしいな」

「俺も聞いた、確か王狼の拠点には人間が住んでいるらしい」

いくつかの噂が立ちあがる。そうして得た結果が

話し合いをする。それしかなかった。

「だが、どうやってあいつと会話する？」

「それは…わからない」

いろいろと王狼で悩むギルドであった。

王狼 side

― 疲れたな

「「そうですね」」

「お疲れ様です」

「ギャオ」

「にゃ」

改めて我が家を見るが・・・

デカいな。転生前の豪邸をも越える広さだな。

――シズクとハクはこれから出かけるんだろう？

「はい！えーとユクモ村に行く予定です」

――温泉が有名な所か、楽しんで来い

「「はい！」」

俺は何をしようか？

時が経つ前に考えないとな

外に出てみるか・・・

しばらく歩いていくと

あれ、見覚えある奴が戦っているな

確か国との戦いで話した奴だ

そこには、ラプター達とロアルドロスが戦っていた。

そしてさりげなく

ビーム（火）を放つ。

貫通して燃え尽きた。

いやいやいや、死ぬの早いな。

まあ、いいや帰るか。

俺はこっそり帰った。

ラプター達は無言でいた。

何事もなく数か月後……

最終話 わだかまり

何事もなく、世界は平和に。

だが王狼は、この世界には存在しない。

皆はそれを不思議に思い。探し。見つからない。

王狼はこの世界を飽きたのだ。

いらぬ強さを求めすぎたのだ。

アイルー達やキリン。人間。モンスターまで。

皆不思議に思った。だが帰ってこない。

今日も世界は、弱肉強食？の日常が続いている。

造られた平行世界。その住人はそんなことも知らない。

だけど、皆はこの世界で頑張っているのだ。

王狼はそんな事を知ったふりをしていたのだ。

それを改めて、この世界から旅立ったのだ。

皆は信じている。王狼が再び戻ってくると・・・

最終話 わだかまり（後書き）

なんだこの終わり方w

この話を読んで下さりありがとうございました。

次回はまだ未定です。

転生者の先の運命は・・・
(前書き)

ふと思いついた奴です。

転生者の先の運命は・・・

また転生させてくれ。

―仕方ない。

ありがたい。

―ただし我が決める

あれ？そんなキャラだっけ？まあいいや

―それじゃあな

早っ！？

―名前だけ言ってやる

なんだ？

―『要塞龍 ラオ・プリズン』

要塞龍で想像付くんだが。。

―安心しろ。護衛つけておくから。

ラッキー？

―今度こそさそらな

ああ

俺はそこから気を失った。

―あいつが放置した世界は平定してるな。
これなら大丈夫だ。あいつも楽しんでるようだし。
無駄にして置いて良かったな。

転生者の先の運命は・・・
(後書き)

今回書くのは短めです

ラオ・プリズンの生態

名前：ラオ・プリズン

通称：要塞龍

体長：ラオ・シャンロンの約10倍

特徴：とてつもなくデカイ。背中とは山と呼べるほどデカイ。尻尾は棘が生えており通り過ぎた後はずさんになる。歩く速度はラオ・シャンロンの2分の1程度。とても硬い。そして背中には護衛用に

『擬岩竜 大蛇』が複数住み着いている。

名前：大蛇^{オロチ}

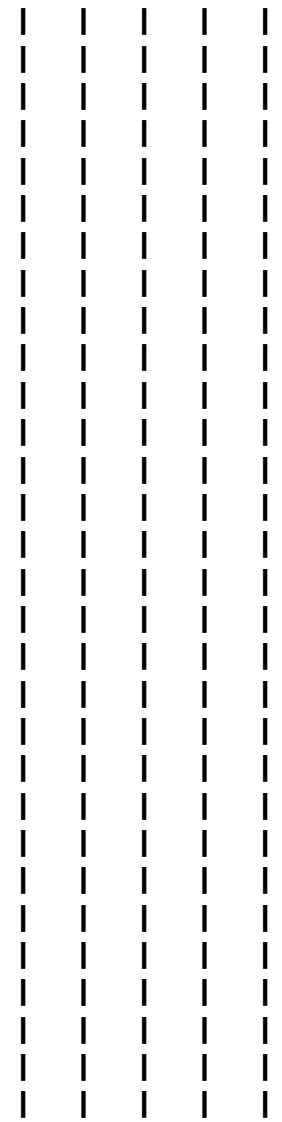
通称：擬岩竜

体長：5メートル程度

特徴：名前の通り大蛇。普段はプリズンの背に住み着いており岩に擬態している。近くに敵が通ると毒・麻 痺効果のある牙で噛み付く。

字稼ぎです気にしないで下さい――――

――――
――――
――――



ラオ・プリズンの生態（後書き）

次話から物語が始まります。

ラオ・プリズン目覚める

ん？ここはどこだ？

俺は確か転生したのか。

この世界の情報を思い出す。

コンコンッ

背中になにか叩いた音が聞こえる

確か背中には大蛇が住んでいるんだよな。

背中には7頭の大蛇がいた。

そつえばラオシャンの10倍だったっけ？

まあ、いいや。動くか。

ゴゴゴゴゴゴッ

起き上がると地震にも似た音が響く。

ふう、起きたはいいが動くのが遅いな。

すると。周りにラオシャンが起き上がる。

「王よ移動するのか？」

ん？王？俺の名前はラオ・プリズンか
あ、ラオって入ってるのか。

―ああ、行くか

「皆の者行くぞ！」

グオオオオオオオ！！！！

周りにいたラオシャン（6頭）が動き出す。
大蛇も喜んでいる。

「どこに行くのだ？」

―適当に進むか。

「了解した」

俺達は動きだす。一歩歩く度に揺れる音がする。

俺達は3時間ほど進む。かなり遠くでシェンガオレンが砦に負け逃
げているところを見た。

―あそこに砦があるな。

「壊しましょうか？」

―頼むぞ

「ハッ！皆の者行くぞおおおお」

「『グオオオオオオ！』」

ふと3頭が砦に走って行った。

そして6時間くらい経っただろうか？

砦の方で崩壊する音が響いた。

俺達もゆっくり進むとそこは廃墟のようなものだった。

―昔に建てられたものか…まあいい俺は少し寝る。皆は自由に活動せよ

「『グオオオオオオ！』」

皆は咆哮を上げそれぞれの方向へ別れた。

―さて寝るか。

夜の明かりがある中で俺は土の中に潜る。

大蛇は岩に擬態しているので寝たかどうか分からなかった。

ラオ・プリズン目覚める（後書き）

次話で会いましょう。

密林横断

コツコツッ

背中を叩く音が聞こえる。

どうやら大蛇が起こしたようだ。

さて起きるか。

ゴゴゴツと音を立て体を持ち上げる。

遠くからみたら山がいきなり隆起したようにも思えるほどの大きさ。

——どこへ向かうか？

俺は背に乗っている大蛇達に語りかけた。

コンコン

どうやらそのまま進めということか

——行くぞ

俺は巨体を揺らし進行方向へ向かい始める。

歩いたあとは破壊された木々。踏みつけられたモンスターの残骸があり、

そこから新しい芽が生える。

歩くこと数日。

疲れる。

確かラオシヤンの歩く半分のスピードだっけ。
遅いと分かるが体が体だけに仕方ない。

それと、

なんか後ろにイーオスの群れがたくさんついてきてるんだけど。
まあ、いいや。

とりあえずただひたすらに進むとしよう。

更に数日。

ついに砦が見えてきた。

かなり遠くだがうつすらと分かる。

恐らく当たるだろうとする壁。

さて、この異常で非常に等しく非情に歩く俺を挫かせることができるか楽しみだ。

俺は、心を躍らせていた。

密林横断（後書き）

短くてすいません。

今回の物語は侵攻でとりあえず終わりにしようというコンセプトです。

もしかしたら、続き書くかもしれませんがw

次話で会いましょう。

皆侵攻戦（前書き）

えーと。とりあえず、プリズン編は終わりですw

多分続編書くかもしれませんが…

砦侵攻戦

今俺は砦に向かっていや、進むべき道に向かっている。

確か、ハンター共がなんらかの仕掛けをしてくると思った。

案の定進むと対巨龍用落とし穴があったり。仕掛けてあったよ。

やれやれ。こんなことしても無駄だと言うのに。

―お前ら道を開けるから蹴散らせ。

俺は今侵攻中だ。

そこにはハンター共がいるわけで。
今第2エリア？に向かっている。

ハンター共が多いから大蛇で駆除してもらっているのだ。
そして終わったらしい。

ふと、考えている間に俺の邪魔になる物は食い散らかされた。
大蛇は腹が膨れたようなので擬岩化してしまった。

―俺が行くしか無いのか。

俺が考えるに普通のラオシャンの通り道を普通に踏み潰しているから歩くのが面倒だ。

俺は一步步き出す。

すると。大地が揺れる。

応援に駆け付けたハンター共は腰を抜かす。
巨体と威圧と揺れのせいだ。

俺は歩いていただけ、ただ歩くだけで
地形が変わる。

それが通る厄災の如く。

しばらく歩いて砦と思われし場所に付いた。

そこからの集中砲火が凄かった。

いきなり砲弾やバリスタが飛んで来たり足を腹をハンター共が切り
つける。

まさに背水の陣の用に思えた。

だが、そんな事では歩みを止められるはずが無い。

10分くらい攻撃をされるとさすがに痛みを感じてくる。

だが歩みを止めない。

それは、俺が進むべき道にあるからだ。

べ、別にミラが怖くて逃げたんじゃないんだから……。やめよう……。

流石に攻撃されるのが面倒になってきた。

俺は咆哮をあげる。

500mくらいが吹き飛んだ。

巨体故にその厄災の如くの攻撃一捻り。

周りをよくみると、自分を中心に大きな円が描かれていた。
しばらくすると大蛇が背中が上がってきた。

さて、邪魔するのもなくなった。進もうか。

——俺は一步を踏みしめた。新たな厄災を降らすことをまだ先のハンター達は知らない。

皆侵攻戦（後書き）

え〜とですね…。

すいません！！短くて。

でも、今回はこれで終わりです。

次回新モンスターを考えているので。
またしばらくお待ちください。

転生者の先の運命は・・・

いやあ、モンスターに転生するのになれてきたよ。

—次は何になりたいんだ？

—よし俺が決めた

—お前は！

なんか増えた…。

ていうか誰だよ？

—神2と考える

分かったぜ2！

—仕方ない今回はお前が決める

—やったぜい！

えー、俺は？

—じゃあな、！

え？はっ？

ふざけんなああああああああああああああああああ

荒ぶってすいませんでした。

—どうしてきた？

暇だから

$$\begin{array}{c} | \\ \vdots \\ \text{\textcircled{L}} \\ \vdots \\ | \end{array}$$

次に転生されるのはどんなモンスターなのか？
あまり期待しないで下さいw。

[illegible]

転生者の先の運命は・・・
(後書き)

友人が案をだしてくれたのでそれを参考に妄s…考えました。

ドライダーの生態（前書き）

投稿しようとしたら2回ミス。

すごくテンション下がりました…。

ドライダーの生態

名前：ドライダー

別称：擬人龍

種族：不明

身長：1.8 m

特徴：頭には2本の角がある。純白の翼と漆黒の翼がある。手足の先は、龍の様な手足がある。そして尻尾がある。体は防具の様な物で覆っている。

腰まである銀髪で目は金色。

攻撃：液体金属の武器を使う。ありとあらゆる武器を創ることができ
る。

字稼ぎ

ドライダーの生態（後書き）

次話から本編です…。

第一話 ドライダーの一日

この体は人に似ているが、やはり龍と分かる。
だつて話せるよ。

現に今りオレウスの背中に乗ってるし。

「何時付く？」

「知らん。」

「ひどくない!？」

「いや、お前が酷いだろ。俺は今からレイアちゃんに会いに行くと
言うのにお前が途中まで乗せろといったんだろ?。」

「仕方無い…おっ!」

「着いたか？」

「助かったぜレウス!」

「はあ、今度はアプトノスの肉だぞ？」

「了解!つと!」

俺はレウスから飛び降りた。

そして背中にある翼で飛び回る。

しばらく飛んで。

「えーと…あつた！」

俺が飛び回って探してたもの、それは

「アイルー村見つけ！」

アイルー達が住んでいる集落。メラルーもいる。

「久しぶりアイルー達！」

「「「にやつ！」「」「」

なんか恐ろしそうな目で見てやがる。

「飯は？」

「これですにや」

出されたのは、豪華な料理。

たとえモンスターでも、俺だけは人間が食べる物でも食えるのだ。
というか、そっちの方が美味い。

現在週2で来ている、守るという条件で。

「美味かった。また寄越せ」

「はいですにや」

関係は普通。

「大変にや！ディアブロスがこっちへ来てるにや！」

「「「にやんだってー！！」」」

「俺の順番？」

「「「にや」」」

一同揃えて言う。

「はいはい、言ってくるよ」

アイルー村から飛びブロスがいる方向に向かう。

お！戦ってるな。

行った先にはハンター×3とブロスだった。
そこではハンターが優勢になっていた。

グオオオオオオ！！

ブロスが逃げようとする。

一人のハンターが音爆弾を投げる。
これでは、可哀そうだ。

俺は武器を槍に換える。

そして、上空にいる所から、ハンター達の武器を狙い投げる。

ズサッ！

「「「!!?」」」

いきなり槍が降ってきたのが驚いたのだろう。
見事命中し、武器は大破して、使えそうになかった。
突然の襲撃者に恐れながら去っていく。

「つまらん」

気絶しているブロスの方へと向かう。

「お前かよ、突進馬鹿」

「なんだと？」

「負けてた癖に、俺がいないと死んでた癖に」

「ぐっ……」

「賢い戦法で戦えよ」

「無理だな」

「突進馬鹿は馬鹿なりにガンバレw」

とりあえず、疲れたから帰ろう。
家に向かって飛び去った。

「バカって言うんじゃないやねえええええ」

このとき、砂漠中に吼え声が響いたと云う。

第一話 ドライダーの一日（後書き）

ドライダーは基本的に中立です

第二話 ドライダーと少女

いやあ、さっきはブロスをからかって楽しかった。

「ここは意外にいいな」

ついさっき密林に来て湖にいるのだがここは木がたくさん生い茂っていて丁度いい。

まあ、湖にはガノトスがいるのだが…。

「う…」

「ん？」

突然声があったのでその方向を見てみると倒れている少女が倒れていた。

「大丈夫？」

「…」

死んだ…気絶しているだけだった。

体中に傷がありボロボロな服を着ていた。恐らく、ランポスにやられたのだろう。

しかし、大事に至るような傷は見られなかった。

「助けてあげようか」

流石に目の前で死なれては困るので
助けることにする。

俺は適当（では無いが）に草（特殊な合成方法でしか発揮できない）
を抜き

水でよく洗い。

磨り潰した（ここ大事！）。

武器を御椀のようにしてあるため問題ない。

それを少女に塗りつける。

すると、さっきまであった傷がすぐに治った。

回復薬グレードの数倍と状態以上直しの効果があるようだ。

「さて、帰るかな」

俺は翼を羽ばたかせて家に今度こそ向かう

飛び立つ同時に少女は起き上がった。

目を開けると、龍と人が合わさったようなモンスターが飛んでいく
姿だった。

自分の傷の回復に驚きながらも無事にユクモ村に帰って行った。

第二話 ドライダーと少女（後書き）

次話で会いましょう

最後（前書き）

いきなり、完結です。

作者には無理があつたんだ！

ということ、今まで見てくれた読者たちには申し訳ないですが
完結させてもらっちゃいます。

最後

神よ

「なんだ」

飽きた

「だろうな」

銃をくれ

「どうしたんだ？ほれ」

助かる

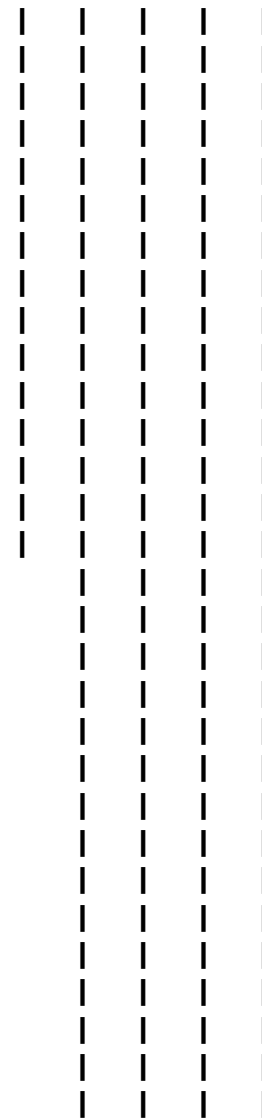
「何に使うんだ？」

飽きたから死ぬ

バンッ！！

頭を打ちぬいて倒れた。

神は何も言わず、ただただ見守るだけだった。



最後（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2440x/>

転生したら、様々なモンスターになりました！！

2011年12月7日04時00分発行